

## 『周易集解』所引の鄭玄易注について

仲畑 信

わたしは以前に、『周易集解』所引の王弼易注について<sup>(1)</sup>という論文を書いた。この論文では、李鼎祚『周易集解』（以下『集解』と略稱する）は、確かに漢代象數易を表章する書物ではあるが、漢代象數易に對する、いわゆる義理易の代表である王弼の易注を排斥するものではなく、むしろ王弼易注を時に優れた解釋として評價していること、それでは、王弼易注のどのような所を評價しているのかというと、李鼎祚の自序に「鄭玄は多く天象を參考にし、王弼は全て人事を釋している」（鄭則多參天象、王乃全釋人事）とあるように、王弼の「人事」（人の出處進退に關わること）による易解釋を、王弼易注の特色を最もよく表わしている注として評價していること、そして、これは推論であり、一つの假説ではあるが、李鼎祚が各家の注釋を『集解』に採用する際には、その注釋者の特色を最もよく表わしている注を採用するという基本方針を持っていたのではないかということ、この三點を論じた。

本論文では、ひきつづき李鼎祚『集解』について考えるために、その自序において王弼と比較されている鄭玄の易注についてとりあげる。ただし、本論文のテーマは、むしろ李鼎祚『集解』であり、鄭玄の易注の全體をあつかうものではない。<sup>(2)</sup>

まず、『集解』所引の鄭玄易注の検討に入る前に、李鼎祚の自序に、「鄭玄は多く天象を参考にし、王弼は全て人事を釋いている」とあるが、李鼎祚の言う「天象」とはどういう意味なのかを考えておきたい。

『周易』の經傳には、「天象」という單語そのものは見られないが、繫辭上傳の「天に在りて象を成す」（在天成象）、同じく「天は象を垂る」（天垂象）、繫辭下傳の「仰いでは則ち象を天に觀る」（仰則觀象於天）が、直接に「天象」と關わる表現である。このうち、「在天成象」は「在地成形」に、「仰則觀象於天」は「俯則觀法於地」という一句に續いていて、「天象」が「地形」「地法」と對比されている。今、これらの表現について、『集解』の引用している各家の注をみることにする。

まず、繫辭上傳の「在天成象、在地成形、變化見矣」について、『集解』は、次のような虞翻の注を引用している。

日と月とが天にあつて八卦（の象）を成すことを意味する。（納甲説によれば）震の象は庚に出で、兌の象は丁にあらわれ、乾の象は甲に滿ち、巽の象は辛に伏し、艮の象は丙に消え、坤の象は乙に失われ、坎の象は戊に流れ、離の象は己に就く。故に「天に在りて象を成す」のである。「地に在りて形を成す」とは、「地にあつて八卦が形を成すということであり」震は竹、巽は木、坎は水、離は火、艮は山、兌は澤、乾は金、坤は土である。天にあつて變をなし、地にあつて化をなし、剛と柔とがたがいに推し、變化を生み出すのである。<sup>(3)</sup>

次に、同じく天と地とを對比する繫辭下傳「古者庖犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地」について、『集

解』は、「仰則觀象於天」については、荀爽の、

震と巽とが雷と風であり、離と坎とが日と月である。<sup>(4)</sup>

という注を引き、「俯則觀法於地」については、九家易の、

艮と兌とが山と澤である。地には水や火などの五行や八卦の形があるのである。<sup>(5)</sup>

という注を引く。最後に、天のみで地への言及がない繫辭上傳の「天垂象、見吉凶、聖人象之」について、『集解』は、荀爽と宋衷の注を引用する。荀爽の注は、

『尚書』に「旋機玉衡（天文觀測器）に在りて、以て七政（日月五星）を齊う」ということである。<sup>(6)</sup>  
と言ひ、宋衷の注は以下のように言う。

天は陰陽の象を垂れ、以て吉凶をあらわす。つまり、日月の光が薄くなったり缺けたり、五星が亂れた運行をすることである。聖人はこれに象り、また九（陽）六（陰）の爻の位に著わし、その得失を人に示す。吉凶のうらないがある理由である。<sup>(7)</sup>

ところで、李鼎祚『集解』の自序は、「鄭玄は多く天象を参考にし、王弼は全て人事を釋いている」と、「天象」と「人事」とを對比している。そのことを踏まえると、『集解』の言う「天象」の意味を考える上で、必ずしも「天象」ということばが使われていなくても、参考にすべき注釋がある。それは乾卦文言傳の注釋である。文言傳の「潜龍勿用、下也」より「乾元用九、天下治也」にいたる章について、『集解』は始めに何妥の、

この章は「乾卦文言傳の」第二章であり、人事により説明する。<sup>(8)</sup>  
という注を引き、そして最後に王弼の、

この一章は全て人事により説明するものである。<sup>(9)</sup>

という注を引用する。一方、續く「潜龍勿用、陽氣潜藏」より「乾元用九、乃見天則」にいたる章については、始めにやはり何妥の、

この章は「乾卦文言傳の」第三章であり、天道により説明する。<sup>(10)</sup>

という注を引き、最後には王弼の以下の注を引用している。

この一章は全て天氣を説いて説明するものである。<sup>(11)</sup>

つまり、文言傳の第二章は「人事」（人の出處進退に關わること）による説明であり、第三章は「天道」「天氣」による説明であるとする。それでは、「人事」と對比される「天道」「天氣」による説明とは、どのような説明なのであるか。初九より用九までの各注（九二のみ李鼎祚の案語で、それ以外は何妥の注）は、以下のとおりである。

十一月に當たり、陽氣は動くけれども、なお地中にある。

陽氣が上昇して地に達する。

これは三月に當たり、陽氣がしだいに成長し、萬物がまさに盛んとなり、天のめぐりとともにめぐって休むことがないのである。

これは五月に當たり、かすかな陰氣が初めて起こり、陽氣はまさに改變しようとする。

これは七月に當たり、萬物が盛んに成長し、天の功業が大いに完成する。

これは九月に當たり、陽氣が大いに衰え、まさに極まり盡きようとする。

陽氣が消えるのは、天氣の常であり、天象の法則は、自然に見ることができぬ。<sup>(12)</sup>

要するに、「天道」「天氣」による説明とは、陽氣と陰氣の盛衰、つまり陰陽二氣の消息に基づいた説明である。坤卦の文言傳「積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃」に對する李鼎祚の案語も、「人事」と「天道」とを對比し、「天道」を陰陽の消息としている。

案ずるに、聖人が教えを設けるには、理は宜しきに隨うことをとうとぶ。故に先生はまず人事を論ずるには、怪力亂神を語らず（『論語』述而篇）、四つのことを絶ち「必ず」とは言わない（子罕篇）。今、易象において、天道を明らかにし、故に「積善の家には、必ず餘慶有り。積不善の家には、必ず餘殃有り」と言うのは、陽氣が生まれ陰氣が衰えるのは、天道の必然であり、國を治め身を修めるには、善を積むことを本とすることを明らかにしている。<sup>(13)</sup>

「天道」を「人道」「地道」と並べる表現は、繫辭下傳に「易之爲書、廣大悉備。有天道焉、有人道焉、有地道焉」とあり、その少し後の「道有變動、故曰爻」に對して、『集解』は陸續の次のような注を引く。

天道には晝夜・日月の變化があり、地道には剛柔・燥溼の變化があり、人道には行止・動靜・吉凶・善惡の變化がある。<sup>(14)</sup>

要するに、李鼎祚自序は「天象」と「人事」とを對比するが、「人事」は「天道」「天氣」とも對比され、さらにその「天道」は「人道」「地道」と並べられる。そこで、これら「天道」「天氣」の解釋も踏まえて、『集解』の言う「天象」の意味をまとめると、「天象」とは、日月五星や雷風晝夜などの運行や變化のことであり、より根本的には陰陽二氣の消息を意味し、それは八卦の象にあらわれる、ということになるであろう。<sup>(15)</sup>

ここからは、『集解』が引用する鄭玄易注を検討してゆく。『集解』の引く鄭玄易注は、全部で以下の四十八條である。

乾九二・九三・九五・文言傳／泰象傳／否九五／同人卦辭／大有卦辭／謙卦辭／豫卦辭・象傳／隨卦辭・初九／臨卦辭／觀卦辭／噬嗑上九／賁卦辭／剝象傳・六二／頤卦辭／咸卦辭／恆卦辭／遯卦辭／晉象傳／明夷卦辭／睽卦辭／損卦辭／益卦辭／夬卦辭／姤象傳／萃卦辭／升卦辭／困卦辭／井卦辭／革卦辭／鼎卦辭／震卦辭（二條）／艮卦辭／繫辭上傳「精氣爲物…故不違」・「河出圖…」／繫辭下傳「困德之辯也」／說卦傳「離」爲電」／序卦傳「蒙」「需」「訟」「豫」「恆」<sup>(16)</sup>

この四十八條を分類すると以下のようなになる。

卦辭の注 二十六條  
 象傳の注 二條  
 象傳の注 三條  
 爻辭の注 七條  
 文言傳の注 一條  
 繫辭傳の注 三條

説卦傳の注 一條

序卦傳の注 五條

なお、ここで言う「象傳の注」とは、卦全體についての象傳（大象）の注である。爻辭についての象傳（小象）の所で引用されている鄭玄注も、隨卦初九と剝卦六二の二條があるが、その内容は、爻辭に對する注となっているので、「爻辭の注」として數えた。

すぐに氣づくことは、卦辭の注の多さである。全四十八條のうちの半數を超えている。象傳と象傳（大象）も、爻ではなく、卦全體について説明しているものであるから、これらの注も卦全體を問題としてことになる。繫辭下傳の注は、困卦についてであり、序卦傳の注の五條も、卦についてである。一方、文言傳の注は、乾初九についての注である。以上を踏まえると、次のように分類することもできる。

卦全體についての注 三十七條

爻についての注 八條

そのほか 三條

『集解』の引用する鄭玄易注は、卦全體についての注が壓倒的に多く、その八割近くを占めている。

『集解』引く鄭玄易注が卦全體についての注が多いということを、具體的に注の文章で見ると、まず、卦の名前となっている文字の意味を説明する注が頻繁に登場する。原文のまま以下に示す。いずれも最初の文字が卦の名前である。各卦の卦辭の注では、

謙者、自貶損以下人。／豫、喜佚説樂之貌也。／臨、大也。／賁、文飾也。／頤、口車輔之名也。∴頤、養也。

／咸、感也。／恆、久也。／遯、逃去之名也。／睽、乖也。／夬、決也。／萃、聚也。／升、上也。∴升、進益之象矣。／革、改也。／鼎、象也。

などがある。一部は彖傳にそのまま見られる表現もある。姤卦の彖傳の注には、

姤、遇也。

とあり、これも彖傳のことばである。序卦傳の注では、

蒙、幼小之貌、齊人謂萌爲蒙也。／訟、猶爭也。／豫、行出而喜樂之意。

などがある。明夷卦の卦辭注には、

夷、傷也。

と、卦名の一部の文字について説明している。

また、『集解』引く鄭玄易注に頻出する注のパターンとして、次のようなものがある。たとえば、同人卦の卦辭の注に、同人という卦の特質について説明したあと、「故にこれを同人と謂う」（故謂之同人）とあるように、まず卦について説明し、そのあと「故謂之「卦名」と續けるパターンである。このパターンは、同人卦卦辭注以外に、豫・隨・頤・明夷・睽・損・益・夬・升・困・革・鼎・震・艮の各卦辭の注、そして、剝卦と姤卦の彖傳の注に見られる。また、少し變形したものとして、咸卦の卦辭注に「故に咸と曰うなり」（故曰咸也）とある。

先に見た卦名の文字の意味の説明と、この「故謂之「卦名」とが、一つの注の中で両方用いられている注も全部で九條ある。その中から升卦（巽下坤上）の卦辭注を見ておく。

升とは、上（のぼる）の意味である。坤は地であり巽は木であり、木が地中に生じて、日び成長してのぼって

く。ちようど聖人が諸侯の中にあつて、明らかな徳が日びますます高大になっていくようなものである。故にこれを升と謂う。升とは、進み益すことの象徴である。<sup>(17)</sup>

この注は、まず卦名についての説明、外内卦の八卦が象徴するものをあげての卦の意味の説明、「猶」（なおのごとし）をはさんで人事（人の出處進退に關わること）による説明、「故謂之升」の一句、そして最後に再び卦名の説明をしている。

以上のように、『集解』は鄭玄の易注のうち、卦全體を説明している注を多く引用しているが、もちろん、文についての注をまったく引用していないわけではない。爻辭の注も七條ある。また、卦辭の注であっても、その卦の中の特定の爻に言及する注もある。たとえば、大有卦（乾下離上）の卦辭注は、まず、大有卦で唯一の陰爻である第五爻に注目して、

六五は離を體して、乾の上にいる。ちようど「六五の」大臣が「離が象徴する」聖明な徳を持ち、「乾が象徴する」君主に代わつて政治を行ない、「第五爻という」君主の位にいて、その仕事を治めているようなものである。<sup>(18)</sup>

と言ひ、續いて卦辭の「元亨」について説明している。このように、『集解』は爻について説明する鄭玄注も引用している。しかし、數の上では、卦全體について説明する注の方がはるかに多く、また、爻についての説明も、大有卦で唯一の陰爻である六五について説明するなど、ただ一つの爻の意味にとどまらず、卦全體の意味を決定づけるような爻についての説明が多い。觀卦卦辭注の九五についての説明、遯卦卦辭注の第二爻と第五爻についての説明、賤卦卦辭注の第二爻と第五爻についての説明なども同様である。つまり、『集解』が引く鄭玄の易注は、それぞれの爻に

ついで説明する注よりも、卦全體を問題としている注が壓倒的に多い。言いかえれば、李鼎祚は『集解』を作るにあたり、鄭玄の易注の中から、卦全體について解釋している注を中心に引用しているのである。

三二

李鼎祚の『集解』自序に「鄭玄は多く天象を参考にし」ているとあった。實際に『集解』引く鄭玄注を見てみると、「天象」を参考にした注がいくつも見られる。たとえば、困卦（坎下兌上）の卦辭注に、

坎は月であり、「二三四の」互體は離であり、離は日である。兌は暗昧であり、日が沈む所である。今、上に日と月の明るさをおおいかくしている。ちように君子が亂れた世の中にあり、小人に受けいれられないようなものである。故にこれを困と謂うのである。<sup>(19)</sup>

と八卦の象として日月が登場する。その後、人事への言及があり、「故謂之困也」へと續いている。日月がともに見られるのはこの注のみであるが、日はこのほかの注にも登場する。たとえば、明夷卦（離下坤上）の卦辭「明夷、利艱貞」の注には、

夷とは、傷（きずつく）の意味である。「離が象徴する」日（坤が象徴する）地の上に出れば、その明るさは光るが、その日が地の下に入ってしまったら、明るさは傷つく。故にこれを明夷（明るさが傷つく）と謂う。日の明るさが傷つくのは、ちように聖人君子が明らかな徳がありながら亂れた世の中にめぐりあわせ、低い地位に抑

えられているようなものであり、そのような場合には、みずから苦しみ悩み、中心となつて政治を行なうことなく、小人の害を避けるべきである。<sup>(20)</sup>

とあり、離の日と坤の地という八卦の象徴により、明夷卦の意味を説明し、後半は人事を説いている。同様の例としては、内卦の坤の地と外卦の離の日をあげる晋卦象傳注、内卦の離の日と外卦の艮の石をあげる賁卦卦辭注があり、ともに八卦の象徴による説明の後、人事への言及がみられる。<sup>(21)</sup>

『集解』の言う「天象」には雷風も含まれていたが、『集解』が引く鄭玄易注のうち、この雷風がともに見られるのは、雷を象徴する震と風を象徴する巽の組み合わせからなる恆卦（巽下震上）と益卦（震下巽上）の卦辭注である。震卦（震下震上）の卦辭注には、雷のみが登場する。そしてこれらの注は、いずれも雷風に基づく解釋の後で人事へと言及している。『集解』が引用する鄭玄注のうち、このほかに雷または風が出てくるのは、豫卦（坤下震上）の卦辭注と象傳注に雷が、觀卦（坤下巽上）の卦辭注に風が出てくる。同人卦（離下乾上）の卦辭注は、「卦の（二三四の）互體に巽があり、巽は風である」（卦體有巽、巽爲風）と云う。

以上のように、日月雷風といった「天象」はしばしば登場するが、すでに見たように、離の日とともに、明夷卦卦辭注と晋卦象傳注では坤の地が、賁卦卦辭注では艮の石が、解釋に用いられていた。雷風が出てくる豫卦・觀卦・同人卦の注では、震の雷と巽の風以外に、坤の地、同じく坤の衆、巽の木、乾の天、離の火も登場する。これら地・石・衆・木・天・火は、天を除き、「天象」とは言い難いように思われる。地・石・木・火は、繫辭上傳の「天に在りて象を成し、地に在りて形を成し」の「地に在りて形を成し」にあたるもの、繫辭下傳の「仰いでば則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀る」の「俯しては則ち法を地に觀る」にあたるものである。いわば、「天象」ではなく、「天

象」に對する「地形」「地法」と言うべきものである。また、坤の衆は、「天象」とも「地形」「地法」とも言えなさそうである。

しかし、『集解』の引く鄭玄易注を見ると、このような八卦の象徴による解釋は、非常に多い。そのような八卦の象による解釋のうち、いわば「地形」「地法」にあたる象徴により解釋をしているものとしては、ほかに、謙卦（艮下坤上）の卦辭注に次のようにある。

艮は山であり、坤は地である。山の形體は高いのに、今、地の下にある。人道におきかえると、高いものが低いものにへりくだることができ、謙の象徴である。<sup>(22)</sup>

また、咸卦（艮下兌上）の卦辭注は、艮の山と兌の澤による解釋をし、損卦（兌下艮上）の卦辭注は、艮の山と兌の澤と、互體の坤の地による解釋をし、艮卦（艮下艮上）の卦辭注は、艮の山による解釋をしている。このほか、噬嗑卦上九爻辭注・睽卦卦辭注・益卦卦辭注・萃卦卦辭注・井卦卦辭注・革卦卦辭注・鼎卦卦辭注などにも「地形」「地法」にあたる八卦の象による解釋が見られる。

『集解』引く鄭玄易注には、以上のような「天象」、そして「地形」「地法」にあたる八卦の象による解釋のみではなく、人に關わる八卦の象による解釋も、しばしば見られる。たとえば、遯卦（艮下乾上）の卦辭注は、

遯とは、逃げ去るという意味の名前である。艮は門闕であり、乾には健やかな徳がある。「二三四の」互體に巽があり、巽は進退である。君子は門を出て、その行ないに進退があり、逃げ去ることの象徴である。<sup>(23)</sup>

と言う。同様の、人に關わる八卦の象による解釋は、謙卦卦辭注の艮の堅固と坤の厚順、隨卦卦辭注の震の動と兌の說、噬嗑卦上九爻辭注の坎の耳、恆卦卦辭注の巽の長女と震の長男による解釋のほか、豫卦卦辭注・隨卦初九爻辭注

・觀卦卦辭注・賁卦卦辭注・頤卦卦辭注・夬卦卦辭注・萃卦卦辭注・困卦卦辭注・井卦卦辭注などにも見られる。

以上のように、『集解』引く鄭玄易注は、内外卦や互體などの八卦の象徴をあげて、しばしば説明している。前節で明らかにしたことと結びつけて言えば、『集解』引く鄭玄易注は、それぞれの爻について説明する注よりも、卦全體を問題にする注が多く、卦全體を問題にする際には、その卦が含む八卦の象徴をあげ、それに基づいて卦の意味や卦辭を説明することが多い、ということになる。李鼎祚は『集解』を作るにあたり、鄭玄の易注の中から、八卦の象により卦全體について解釋する注を多く採用しているのである。

#### 四

それでは、李鼎祚の自序の「鄭玄は多く天象を参考にし、王弼は全て人事を釋いている」については、どのように考えればよいのであろうか。

まず、「地形」「地法」についても多くの八卦の象をあげ、人に關わることについても多くの八卦の象をあげていることについては、これらも含めて「天象」と言っているとは考えられないだろうか。第一節で、『集解』の言う「天象」とは、日月五星や雷風晝夜などの運行や變化のことであり、より根本的には陰陽二氣の消息を意味し、それは八卦の象にあらわれる、ということになる、とした。確かに天地人に分けて考えれば、地や人に關する八卦の象を「天象」に含めるのは不合理に思われる。しかし、「天象」とは、陰陽二氣の消息が八卦の象にあらわれたものでもあつ

た。しかも、李鼎祚は、自序において「天象」と「人事」とを對比している。乾卦の文言傳では、第二章を「人事」による説明とし、第三章を「天道」「天氣」による説明とし、ここでも「人事」と天とが對比されている。坤卦の文言傳の李鼎祚の案語も「人事」と「天道」とを對比している。ここで言う「人事」とは、人の出處進退に關わることという意味であり、その「人事」と對比される「天象」を天地人を含めた八卦の象と考えることもできるのではないだろうか。「天象」には、日月雷風はもちろん、山澤水火なども含んだ天地自然のさまざまな變化や、さらには人の世界におけるさまざまな變化も含まれるのであり、そして、その變化を引き起こしているのが陰陽二氣の消息であり、それは八卦にあらわされていて、その八卦の象による解釋こそが、李鼎祚の自序が言う「鄭玄は多く天象を参考に」するということの意味なのではないだろうか。

それでは、「人事」については、どうであろうか。

『集解』の引用する鄭玄易注は、「天象」を多く説いているが、「人事」もまたしばしば説いている。このことは、これまでに引用してきた鄭玄の注の中にすでに充分にあらわれているであろう。たとえば、先に見た謙卦の卦辭注は、八卦の象による説明の後、「其于人道」（人道におきかえると）という一句をはさんで人事を説いている。咸卦の卦辭注は、八卦の象による説明の後、「其于人也」（人におきかえると）という一句をはさんで人事を説いている。また、『集解』引く鄭玄易注には、注の中ほどに「猶」（なおのことし）、あるいは「是猶」ということばが使われている注が十七條もある。これらはほぼすべて、まず「天象」を説き、「猶」「是猶」をはさんで「人事」を説くものである。これまでにあげたものとしては、升卦卦辭注・大有卦卦辭注・困卦卦辭注・明夷卦卦辭注がその例である。ほかには、同人卦卦辭注・豫卦象傳注・賁卦卦辭注・恆卦卦辭注・睽卦卦辭注・損卦卦辭注・益卦卦辭注・夬卦卦辭注・井卦卦

辭注・革卦卦辭注・鼎卦卦辭注・震卦卦辭注・艮卦卦辭注にも、このパターンが見られる。また、「其于人」「猶」という表現を使うことなく人事に言及している注もある。つまり、『集解』引く鄭玄易注は、「天象」についても多く説いているが、「人事」についてもそれと同じくらい説いていて、決して「天象」のみにかたよった注ではない。

わたしが先に書いた論文『周易集解』所引の王弼易注について<sup>24</sup>では、李鼎祚の自序に「鄭玄は多く天象を参考にし、王弼は全て人事を釋いている」とあり、さらにその後「それに易の道というものは、どうして天か人かに偏り滞るものであろうか」と續くことから、鄭玄の易注は「天象」にかたより、王弼の易注は「人事」にかたよっている、李鼎祚は考えていると、わたしは判断した。しかし、今回、実際に『集解』の引く鄭玄易注を検討してみると、『集解』の引用する鄭玄注は、「人事」についても説いていて、決して「天象」のみにかたよった注釋ではない。この点については、どのように考えればよいのであろうか。

一つには、李鼎祚の自序の文意を、わたしが正しく理解していない可能性もある。自序がかたよった注としているのは王弼注のみで、鄭玄の注はかたよった注とは考えていないのかもしれない。しかし、同じく自序は、『周易』の多くの注釋（當然、鄭玄の注も含まれる）について、「なおいまだにその奥深さを極め盡くしてはいない」と言っていることなどから考えて、自序の文意としては、鄭玄注は「天象」にかたよっている、と讀むことができるように思う。

もう一つの可能性としては、李鼎祚は、鄭玄の易注全體を、「天象」のみを多く説いて「人事」をあまり説くことのない、かたよった注釋ととらえた上で、鄭玄の易注の中の「天象」のみでなく「人事」をも説いている注釋を、鄭玄易注の中のすぐれた注釋として、『集解』に引用したのかもしれない。

『周易集解』所引の王弼易注について」において、わたしは、李鼎祚が各家の注釋を『集解』に採用する際には、その注釋者の特色を最もよく表わしている注を採用するという基本方針を持っていたのではないか、という假説を提起した。そして、これと関連して、『集解』を讀むと、各家の注釋にはかなり強い個性が感じられる」とも述べた。これは、今回検討した鄭玄の易注にもあてはまる。『集解』引く鄭玄易注は、卦全體の意味を、その卦が含む八卦の象により説く注が多く、また、「天象」と「人事」とをあわせて説く注が多い。もし鄭玄易注が全體としては「天象」にかたよっていたのならば、先の假説に従えば、『集解』は鄭玄注の中の「天象」にかたよった注を採用する、ということになるのかもしれない。しかし、各家の注釋を集めて一つの書物を作り、それを後の世に残そうとする以上、缺點のある注のみを採用するとは考えにくい。先の假説に「すぐれた」の一語を加えて、「その注釋者の特色を最もよく表わしているすぐれた注を採用するという基本方針を持っていた」と修正すれば、この假説は鄭玄注の場合にも成立しているように思われる。

注

(1) 『中國思想史研究』二十二、一九九九年。

(2) 『集解』の引用は、『十三經清人注疏 周易集解纂疏』（北京、中華書局、一九九四年）による。また、『集解』の引く注の解釋については、李道平の『纂疏』や、鈴木由次郎『漢易研究』（明德出版社、一九六三年）を參

照した。

(3) 謂日月在天成八卦。震象出庚、兌象見丁、乾象盈甲、巽象伏辛、艮象消丙、坤象喪乙、坎象流戊、離象就己。故在天成象也。在地成形、謂震竹巽木、坎水離火、艮山兌澤、乾金坤土。在天爲變、在地爲化、剛柔相推、而生變化矣。

(4) 震巽爲雷風、離坎爲日月也。

(5) 艮兌爲山澤也。地有水火五行八卦之形者也。

(6) 謂在旋機玉衡、以齊七政也。

(7) 天垂陰陽之象、以見吉凶。謂日月薄蝕、五星亂行。聖人象之、亦著九六爻位、得失示人。所以有吉凶之占也。

(8) 此第二章、以人事明之。

(9) 此一章全以人事明之也。

(10) 此第三章、以天道明之。

(11) 此一章全說天氣以明之也。

(12) 當十一月、陽氣雖動、猶在地中。／陽氣上達于地。／此當三月、陽氣浸長、萬物將盛、與天之運、俱行不息也。

／此當五月、微陰初起、陽將改變。／此當七月、萬物盛長、天功大成。／此當九月、陽氣大衰、向將極盡。／陽消、天氣之常、天象法則、自然可見。

(13) 案、聖人設教、理貴隨宜。故夫子先論人事、則不語怪力亂神、絕四毋必。今于易象、闡揚天道、故曰積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃者、以明陽生陰殺、天道必然、理國脩身、積善爲本。

(14) 天道有晝夜日月之變、地道有剛柔燥溼之變、人道有行止動靜吉凶善惡之變。

(15) 李鼎祚の言う「天象」の意味については、朱伯崑『易學哲學史 上冊』（北京大學出版社、一九八六年）の第二編第五章第二節「李鼎祚的易學觀」にも言及がある。

(16) 序卦傳の注については、注がつけられている卦の名前で示した。また、『集解』は序卦傳を各卦の經傳の間と説卦傳の後に重複させている。鄭玄注も、蒙・訟・豫・恆卦で重複しているが、その文章はほぼ同じであり

（豫卦のみ一部異なる）、重複しては数えていない。なお、繫辭下傳「易之興也、其當殷之末世……」において、『集解』は虞翻の注を引き、その虞翻注が鄭玄の説を引いているが、これも四十八條の中には入れていない。

(17) 升、上也。坤地巽木、木生地中、日長而上。猶聖人在諸侯之中、明德日益高大也。故謂之升。升、進益之象矣。

(18) 六五體離、處乾之上。猶大臣有聖明之德、代君爲政、處其位、有其事而理之也。

(19) 坎爲月、互體離、離爲日。兌爲暗昧、日所入也。今上弇日月之明。猶君子處亂代、爲小人所不容。故謂之困也。

(20) 夷、傷也。日出地上、其明乃光、至其入地、明則傷矣。故謂之明夷。日之明傷、猶聖人君子有明德而遭亂世、抑在下位、則宜自艱、无幹事政、以避小人之害也。

(21) 星が登場するのは臨卦卦辭注の一例のみで、「斗」（北斗七星）が登場する。

(22) 艮爲山、坤爲地。山體高、今在地下。其于人道、高能下下、謙之象。

(23) 遯、逃去之名也。艮爲門闕、乾有健德。互體有巽、巽爲進退。君子出門、行有進退、逃去之象。

(24) 『集解』引く否卦九五爻辭の鄭玄注は、いきなり「猶」から始まっている。これはおそらく、『集解』が鄭玄注を引用するにあたり、「猶」より前の「天象」の部分を省略したのであろう。